

うにも少し早い気がする。しかし今、これだけの事は言へる。予期したよりもい、投稿が見えて来て、少くとも発表したもの、上から推して、季題寸言は将来に於ては、かなりの処に進み得る予感がある。これは大変に喜ばしく思ふところである。

芸術上の事には私は一切妥協をしない。これから有つ季題寸言の選に方つてもさうである。随分数多く作品を見せてくれた人でも一つも抜かなかつた人もある。さういふ人は熱心さが見えるだけに濟まなくは思ふが、感情から抜いて不純な作品が誌上に残ることは、結局作者自身の恥であり、また私の恥である。かういふ恥をさらしてゐる人が世間にはうんざりするほど居る。顔がほてらうではないか。恥を恥と知らない人はそれでい、かも知らないが、私たちはそれを恥とする。

多く抜かれなかつた人には、かういふ私の立場を許して貰はなければならぬ。そして不断に作品を寄せて戴きたい。お正月が来る。新年号には一層い、作品が集まることを期待したい。

### 「季題寸言」選後

(曲水 8-16)

今月は三月ぶりの発表になります。二月号かぎり私は黙って発表を休んでをりました。発表する心持になれなかつたからでした。そして四月号分五月号分と順に投稿を見ながら、一層私は選び悪くなつたのに気がつきました。敢て投稿が減つたわけではありません。おそらく、木の芽の頃から春へかけて、誰も感ずるやうにしみじみ仕事が出来ない、この気候のせいだったのでせう。さう思つて、気をつけて三月分の投稿を更に見て行くと、果してい、作品に乏しいばかりでなく、一体の調子が、今までに比べてずつと落ちてゐるのに気づかずにはゐられませんでした。

今月発表の分は、三月も休んだ後の三回分の発表にしては、少し情ない成績でした。そして、これが例になく寛選の結果です。しかし、もう気候も定まり多少心も落ちつけませう。今後の投稿を期待します。

この季題寸言に就ても兎角の批評があるやうです。善くもまた悪くも。然し、この選に當つた私は、初めから人知れず考へたり苦しんだりして真地面にやつてをります。投稿者諸君の中にも私同様真剣な意気込が見えてをります。私は微笑しております。まだ初めて六、七回の発表に過ぎません。よしまだ拙くても真地面なのを私はひそかに喜びます。

### 「誰れ彼れ曰」

(曲水 8-16)

南涯曰——季題寸言といふものは感心しない。あんなものを別に募らなくてもみんなの毎日作つてゐる俳句は即ち悉く季題寸言ではないか。すでに苔雨氏も、「之は句にすればもつと良くなる境地を持つてゐる」など考へられるそうだ。それならば何様「もつと良くなる」句にしないか。それを季題寸言で放つて置くのは俳人として骨惜みではなからうか、又俳句より字数の多いのが季題寸言と思つて、字あまり俳句の様なものを投じてゐるのを毎度見受けるが、そんなのは海紅に沢山い、のが載つてゐる。

\* \* \*

長頸子曰——去年この選を初める前に僕が書いた感想みたいなものを読まれたなら、今こんな批評をされるのは少し意外だが、季題寸言と俳句とは全く違ふ。(中略)：飯を食つても寿司を食つても我々はたんのうする。が、これも全くの別物だ。すべて、そのものは別なものでも後の心持が似てゐるからなのだ。俳句を俳句な